



Title	砂漠と内面：カーリン・ボイエ『カロカイン』における「有機的なもの」の萌芽
Author(s)	片井，優花
Citation	待兼山論叢．文化動態論篇．2021， 55， p. 43-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91497
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

砂漠と内面

——カーリン・ボイエ『カロカイン』における「有機的なもの」の萌芽——

片 井 優 花

キーワード：Kalloccain／Karin Boye／砂漠の街（ökenstad）／有機体（organism）／
スウェーデン文学

はじめに

小説『カロカイン—— 21 世紀からの小説』（1940）¹⁾ は、大規模な戦争を経た未来のとある国家、＜世界国家＞を舞台とするディストピア小説である。全体主義・管理主義的なこの国においては、＜国家＞という共同体に奉仕すること以外に個人の存在意義は認められておらず、個人はその内面に至るまで、＜国家＞に忠誠を尽くさなくてはならない。また、国民は互いを疑い、監視しあうことが求められている。しかし一方で、作中にて個人はすでに完璧に＜国家＞に支配されているのかというと決してそうではない。恐怖ゆえに表立って表現されることはないものの、個人のなかにはいまだ＜国家＞に支配されない私的な思考や感情が残っている。これらを白日の下に晒したのが、科学者である主人公レオ・カールが開発した薬「カロカイン」だった。カロカインを注射された者は、自身の内面を隠すことなく語ってしまうのである。この発明によって、ついに＜国家＞は個人の内面まで監視し、裁くことが可能になった。

ところで作中には、＜砂漠の街＞という場所についての伝説が登場する。＜国家＞の支配の及ばない場所にあるとされるこの街は、その地上は有毒物質に汚染され、瓦礫だらけの廃墟と化しているものの、地中には清らかな水

と土壤があるのだという。カロカインの投与を通してある被験者からこの伝説を聞いたレオは、これを強く侮蔑しながらも、どうしてもなく魅了され、夢にまで見るようになる。

スウェーデンのモダニズム期を代表する詩人・小説家であるカーリン・ボイエ（Karin Boye, 1900-1941）によって第2次大戦下に出版されたこの作品は、当初からヒトラー支配下のドイツや、スターリン支配下のソヴィエトといった当時の時代背景を反映するものとして受容され、ボイエ自身の経験と結び付けて論じられることが多かったという（Forsås-Scott 127）。彼女は1928年に社会主義・反ファシズム団体クラルテの仲間とともにソヴィエトを訪問しており、1932年から33年にかけては精神分析を受けるためにベルリンに滞在していたためである。また管見のかぎりでは、現代においてこの作品は、「ディストピア小説」という枠組において検討されることが多い。

一方で本稿は先行研究の射程を越え、「人間どうしの間に常に存在する恐怖とその克服」という、より普遍的な観点から解釈を提示することを目指す。その問題こそ、〈国家〉と「あたらしい世界」という、本作に登場する2つの異なる共同体のあり方を読み解く土台となるためである。

『カロカイン』は20年以上前のことを回想して綴ったレオの手記によって展開されるが、このとき彼の関心の中心にいたのは妻のリンダである。レオはリンダに対する自身の感情を反〈国家〉的なものであると自覚しつつも、彼女との精神的な結びつきを内心追い求め続けていた。しかしレオにはリンダの内面を推し量ることができない。自分ばかりが彼女のことを想っているように感じられるばかりか、彼女に見透かされ、優越されているような恐怖すら覚える——。ここには、「ディストピア」という舞台設定を越えて、我々人間が常に抱えている他者への恐怖を読み取ることができる。本作はこの恐怖と、それを克服して個人と個人が精神的に深く結びあうことの可能性を、レオとリンダという一組の夫婦を中心に据えながら描く。そしてこの夫婦の物語を拡大するかたちで、〈世界国家〉という organisera（英：organise）された organism から、organisk（英：organic）な organism である

「あたらしい世界」への、共同体の交替の可能性が示されるのである。

これを検討する上で鍵となるのが、「砂漠」というモチーフである。本作では「水」のない「砂漠」に個人の私的な内面の存在が許容されない<国家>が重ねあわされ、いつかそれと交替する可能性を持つ別の共同体の姿として「あたらしい世界」が提示される。本稿ではまず<世界国家>に注目し、これを<砂漠の街>というモチーフから分析する。このとき、<砂漠の街>の地上に広がる砂漠が<国家>の、地下に配置された空間が個人の自由な内面の象徴となっていることがわかる（第1節）。次いで、その上でカロカインという薬が<国家>という砂漠に「有機的なもの」、すなわち個人の私的な思考や感情を発芽させるものであることを指摘する（第2節）。さらに、一度語られた個人の私的な内面は次第に自由な意志による語りを誘発し、この語りの輪の広がり「あたらしい世界」への希望へとつながることを論じる（第3節）。

なお、特に注記のない場合『カロカイン』本文からの引用は富原眞弓による邦訳版を採用するが、拙訳を採用する場合その旨とスウェーデン語原典のページ番号を明記する。拙訳は富原による邦訳を参考とした。引用中の下線はいずれも筆者による。

第1節 砂漠となった<世界国家>

1-1. 私的な内面の失われた<国家>

作品の舞台である<世界国家>は、全体主義的な管理社会である。<国家>は現在戦争と隣り合わせの状態にあり、国民たちは互いに「同輩兵士」と呼び合って、「心をひとつに」（30）して戦争に協力する。「<国家>がすべてであり、個人は無である」（134）とされ、建物のいたるところに埋め込まれた傍聴のための<耳>や監視のための<眼>が、反<国家>的な言動をする者がいないか常に国民を見張っている。また言動に現れずとも、<国家>の理念に反するような思考や感情を持つこと自体が問題となる。

国民はその内面まで<国家>に捧げなくてはならないという規範は、<国家>を巨大な身体と捉える思想に由来していると推察することができる。以下はレオが<国家>という「^{ゲマインシャフト}共同社会」²⁾に関する、作中世界の通念的な理解について言及している箇所である。

下等生命体と高等生命体の差とはなにかを、同輩兵士ならだれでも子ども時代に教わっているはずだ。一方に、複雑化と差異化に達していない、たとえば単細胞の生物や植物に代表される下等な生命体。他方に、複雑で多層的に差異化した、たとえば繊細で高機能な組織から構成された人間の身体に代表される高等な生命体。(中略) 社会の形態についてもまったくおなじことで、いわば社会の身体も、いきあたりばつたりの烏合の衆からなる部族から、あらゆる形態のなかでもっとも高度に組織化され差異化された形態へと、すなわちわれらが<世界国家>なる社会へと発展をとげてきたということを。個人主義から集団主義へ、孤立から共同へと、われらが巨大にして聖なる有機体は発展の一途をたどってきたのだ。この有機体のなかにあって、ひとりひとりの人間は、有機体全体に奉仕するほかに意味をもたない一個の細胞にすぎない。(66)³⁾

いわゆる国家有機体説的なこの思想のもとでは、個人はあくまでひとつの細胞であり、<国家>という「有機体」(“organism” Boye 52)へと「組織化」(“organiserade” Boye 52)されて、常にそのなかで機能を果たす。ゆえに、<国家>に生きる人々は、みな同じ方向を向いているという意味で孤独ではなく、みな等しく意味を持たない。意味を持つのはただ<国家>という共同体のみである。そしてこのとき、<国家>と個人の間の絆を断ってしまう危険性を持つ個人同士の(個人主義的な)絆は、反<国家>的なものとして罪となる。

この理念は、個人主義的な社会において生じる「万人の万人に対する闘争」(Boye 66; 拙訳)に対するアンチテーゼとして提示されたものであると

考えられる。作中世界においては、＜国家＞が現在の体制になるより前には、現在とは全く異なる社会——「個人主義」「孤立」という言葉で表現される社会——が存在していた、という歴史認識が人々に共有されている。現在の＜国家＞と対比的に、そして侮蔑的に言及されるこの「＜文民・個人主義＞の時代」(173)には、よりよい生を実現するための資源の獲得を動機として、「個人が個人と争いあい、社会的集団が別の社会的集団と争いあう」(173)のが常であったとされる。またレオの発言から、この時代には「個人が互いに密接につながりあいすぎる」(86)という事態があった(とされている)ことが推察され、この像はつまり、いま我々が生きる社会に近いものであることが読み取れる。翻って、「よく組織された」(“välorganiserad” Boye 66; 拙訳)現在の＜国家＞の体制は作中にて、かつての個人主義社会において生じていたような「万人の万人に対する闘争」を克服するものとして捉えられている。作中の講話では、かつて個人は「孤立した中核である他者に由来する危険」(242)のなかに生きていたが、＜世界国家＞こそが「瑕疵も欠陥もない安寧」(242)をもたらした、という趣旨のことが語られる。＜国家＞に奉仕すること以外に存在意義を持たない個人は、他者と何を争う必要もなく、ただ＜国家＞の繁栄という唯一の目的のために同じ方向を向いて生きることになる。理念的には＜国家＞は「闘争」を生まず、それゆえそこに生きる個人は、個人主義時代に存在していたような他者への恐怖から解放されるのである。

しかし実際のところ、現在の＜国家＞に「瑕疵も欠陥もない安寧」がもたらされていないことは明らかである。＜国家＞には、他者への恐怖が蔓延している。反＜国家＞的な言動を発見した際には告発する義務があるため、国民たちは常に互いに疑いあわなくてはならない。さらにレオ曰く、「＜国家＞を存在せしめる神聖かつ必然的な根拠とは、われわれ人間が互いにもっともな不信をいだきあうこと」(133)にあるのだという。この発言は、元来個人の間に生じるだろう不信および闘争を防ぐという機能を(少なくとも理念的には)持っていた＜国家＞が、むしろ個人間の不信を＜国家＞を存続させ

るために不可欠なものとして規範化するようになったことを示している。

他者への不信や恐怖は、夫婦という関係の中にも入りこむ。レオの妻リンダによる「ふしあわせな愛」「しあわせな愛」に関する言説からは、〈国家〉の現状を読み取ることができる。カロカインを注射された際に彼女は、「若い娘にもどって」(202)、「ふしあわせな愛」を体験してみたいと語る。

「若い娘というのはね、なにかべつなものがあると信じるのよ。たとえば自由、愛とともに得られる自由。愛するひとのそばでみいだす避難場所のようなもの。温もりみたいなものや安らぎみたいなもの。……存在しないなにか。ふしあわせな愛……よろこんで絶望するのよ、ほかならぬこのわたしが、ほかならぬあなたと、大いなるしあわせを射止められないってことに。……そして思うの、ほかのひとはこのしあわせを射止めたんだって。しあわせは存在していて、射止められるものなんだって。……あなたはわかるはずよ、世界じゅうに遊びがあふれ、あらゆる渇きに目的地があるのなら、ふしあわせでいることだって希望を失うことじゃない。絶望することもない。」(Boye 160; 拙訳)

上記の通り「ふしあわせな愛」とは、その関係の中で「自由」や「安らぎ」といった「なにかべつなもの」を、それが存在すると信じて追い求める愛のことである。「若い娘」たちが求めるその「なにかべつなもの」(“något annat”)を、大人であるリンダは「存在しないなにか」(“något som inte finns”)と言い換える。つまり、「若い娘」たちは実際のところ手に入れられないものを追い求めているのであり、その点でその愛は非合理的で「ふしあわせ」なのである。しかし、「ふしあわせな愛」には常に目指す「目的地」——そこに到達したら「なにかべつなもの」が得られると人が信じる場所——があり、ゆえにその愛には希望があった。一方で、現在大人となったリンダがレオに対して抱いている「しあわせな愛」は、以下のように言及される。

「でもね、しあわせな愛は少しずつ空疎になっていく。目的地はなく、ただ孤独だけがある。どうしてなにかべつなものが存在しうるの、どうしてわたしたちひとりひとりに意味が存在しうるの。わたしはあなたを愛しすぎたの、レオ。だからあなたもいなくなった。」(Boye 160; 拙訳)

この「しあわせな愛」とは、＜国家＞の規範のもとにおける愛のかたちであると考えられる。＜国家＞においては個人が個人との間につながりを求めることは許容されておらず、ゆえに他者との関係から得られる「なにかべつなもの」や、個々人の「意味」は理念的には存在し得ない。このとき国民たちは＜国家＞の存在によって、「存在しないなにか」を求めて「目的地」を目指すという非合理的な「ふしあわせな愛」を免除されており、ある意味で「しあわせ」だと捉えられる。「ふしあわせな愛」が「叶わないけど希望がある」状態であるとすれば、「しあわせな愛」は「叶えるべきものがない」状態であると言える。国民はただ、共同体の穏やかな細胞でいることができるのである。しかし、リンダは決してそれに幸福を感じていない。孤独で、次第に空虚になっていく「しあわせな愛」のあり方に絶望を覚えたリンダは、もう一度「ふしあわせな愛」を体験したいと願う。とはいえ、大人になり＜国家＞の規範を内面化した現在のリンダに、「ふしあわせな愛」は到底手に入れない。

ここにおいて、この「しあわせな愛」をリンダに強いているのは、個人に「共同体に奉仕する」以外の意味を認めず、不信を植え付け、内心の自由すらも奪っている＜国家＞の構造そのものであると言える。＜国家＞は合理的な「しあわせな愛」を提供するが、「しあわせな愛」は個人に「孤独」だけを残す。詮ずるところ、リンダの上記の発言は、「孤独」を否定し「共同」を唱える＜世界国家＞が、実質的には「孤独」を生み出していることを指摘するものとなっている。＜国家＞は「共同社会」を目指し、内面に至るまですべての自由を奪って国民を「細胞」にした上で、＜国家＞という「有機体」(organism)を「組織する」(organisera)。それによって個人主義社会におい

て生じるような孤独や恐怖が縮減されると一般には理解されているが、実のところ、それ自体が孤独と恐怖を蔓延させる原因となっている。〈国家〉はいまや、自分たちが一体となった「共同社会」なのだと、「隔絶のそれぞれの側から叫んでいる」(Boye 181; 拙訳) 状態に陥っているのである。

そんな〈国家〉にありながら、なお他者との個人的で精神的な結びつきを求めるのが「砂漠をさまようひと」たちである。次項では、伝説上の街〈砂漠の街〉から、この〈国家〉の姿とそこでもがく人々の姿を読み解いていく。

1-2. 砂漠としての〈国家〉と地下に眠る個人の内面

〈砂漠の街〉は実在が定かでない伝説上の街である。レオはこの街に関する情報を、「狂人の集団」^{セクト}に属するある男性に対して行われた尋問の記録のなかに発見した。その男性の語ったとされる内容によると、〈砂漠の街〉は〈世界国家〉成立以前に存在した街であり、すでに戦争によって滅ぼされ、現在は廃墟になっている場所だという。「〈国家〉の権力のおよばない、^{ゲマインシャフト}共同社会の外にある領域」(176) であるとされ、具体的な位置は誰も知らない。地表は有毒のガスに汚染され、瓦礫だらけになっているが、地中には「清らかな水脈」(172) がある。また、「数少ない住人たちは、危なくない道や隠れ処を知っており、友愛でむすばれ、互いに助けあって生きている」(172) のだという。この伝説は、〈国家〉に忠実であろうと努める主人公レオに「厭わしいと同時に、魅せられてしまう」(176) ものとして大きな影響を与える。それが〈国家〉の規範にもとる存在であると理解していても、レオはこの〈砂漠の街〉という伝説上の空間に抗いがたい魅力を感じてしまうのである。

この〈砂漠の街〉はレオの夢にも登場する。夢の中でレオは〈砂漠の街〉の汚染された地表におり、「この道の終点にたどりつけるかどうか、自分の命運がかかっている」(188) と考えながらある一本の道を歩んでいた。ところが道の途中で前進も後退もできなくなり、途方にくれてしまう。そのとき、彼は偶然ある女性が手招きしているのを発見し、彼女の案内する地下室

へと逃げ込む。そこは石で作られた荒れ果てた空間である一方で、その上部には草花が生い茂り、土の床には泉の水が湧き出していた。レオはこの地下室のことを「安全な隠れ家」(190)であると表現する。彼は決して自分もともと目指していた場所にたどり着いたわけではないが、にもかかわらずここで大きな安心感を得るのである。

では<砂漠の街>は作中において一体どのような意味を持つのだろうか。これを考えるにあたって、まずは作中で「砂漠をさまよう」という比喩が使われている箇所を参照したい。ある女性がカロカインの実証実験の被験者になった場面である。その女性は、自身の夫がスパイ計画（実はこれは実験のために科学者や警察たちによってねつ造されたものである）を抱えていることを知りながら、彼を告発しなかった。それゆえ彼女は研究室へと連行され、自白を引き出すためにカロカインを注射される。当初憔悴した様子だった彼女は、カロカインを投与された途端、安らかな様子で夫に感謝しはじめ、「わたしはあのひとが怖かった。なのに、あのひとはわたしのことを怖がらなかった」(79)と語る。スパイ計画という大きな秘密を、告発される危険も顧みずに打ち明けてくれた夫の「勇敢さ」(78)に彼女は感動したのである。しかし、彼女のこの様子はカロカインの効き目が切れるとともに一変する。途端に叫び声をあげ、恐慌状態に陥る彼女を見て、<国家>に忠実な兵士であるレオは彼女を軽蔑的に描写する。

ファーク・モルガナ

わたしは蜃気楼のことを思いだした。砂漠をさまようひとが、塩湖の向こうにみる幻だ。ヤシの樹、オアシス、泉。悪くすると、そのひとは膝をかがめて塩の池に口をつけ、そして命を落とす。彼女もおなじことをしたのだと思った。反社会的で、個人主義的感傷に満ちた泉から、わたしたちがすすめる飲みものは、いつの世も変わらない。幻想、それも危険な幻想である。(Boye 63; 拙訳)

ここからは、「砂漠」が<世界国家>のメタファーとなっていること、被験

者の女性はこの〈国家〉において自らの夫との個人的なつながりを追い求めており、それが「砂漠をさまよう」という言葉で喩えられていることがわかる。被験者の女性は長らく「反社会的」な欲求、すなわち自身の夫と信頼しあいたいという反〈国家〉的な感情を抱いてきた。個人同士の結びつきを許さない〈国家〉において、彼女は自身の夫のことを恐れながらも、彼とのつながりを渴望していたのである。それゆえ彼女は嘘のスパイ計画についての夫の告白を信じ込み、「反社会的で、個人主義的感傷に満ちた泉」から癒しを得られると信じてそれに口をつけた。しかし彼女が夫から打ち明けられたのはあくまで嘘の計画であり、彼女が手に入れたと思っていた安らぎは虚構にすぎなかった。これはリンダの述べた「ふしあわせな愛」の形と一致する。彼女は個人主義的な、「存在しないなにか」への欲求を持っていたばかりに、たやすく夫に欺かれ、偽りの安らぎを手にし、研究室でそれを打ち碎かれた。

以上を踏まえると、夢の中で〈砂漠の街〉の地表を歩き回るレオの姿は、彼がリンダとの個人的で密接なつながりを内心渴望し続けていたことを示していると捉えることができる。彼は長年、妻リンダがいつか自分の「盟友になってくれるかもしれない」(194) という、〈国家〉の規範にもとる願望を抱いていたが、同時に、彼はリンダに対して恐怖も感じ続けていた。常に見透かされているような気がするものの、自分は彼女の内面を推し量ることができない。彼女にどうしてもなく惹きつけられ彼女のことを愛しているものの、彼女が自分のことをどう思っているのかは全くわからない——。苦悩に満ちた結婚生活のなかで、レオはなおリンダという個人と深い精神的なつながりを構築することを強く願い、それを可能にしてくれるであろう、リンダの内側にある（と彼が信じている）「楽園」(209) に対して「渴き」(209) を抱いていた。つまりレオもまた〈国家〉という「砂漠」をさまよいながら、自らの「渴き」を癒してくれるもの——すなわち「水」——をどこか遠くの地に探し求めるのである。そして夢のなかで彼はその「水」を、偶然にたどり着いた砂漠の地下室に発見した。ここにおいて地下室は、個人の

私的な内面の自由が許容される空間——「反社会的で、個人主義的感傷に満ちた泉」に湧き上がる「水」に口をつけることが許される空間——を表象している。

ここまでで、＜砂漠の街＞の地表に広がる砂漠が＜国家＞の、その地下にある地下室が個人の内面を表象していることが導かれた。個人どうしの絆を認めない＜国家＞は地表を「砂漠」へと変えてしまったが、個人の私的な内面は、抑圧されながらもたしかに生き延びているのである。

第2節 内面を萌芽させる薬「カロカイン」

第1節では「砂漠」というメタファーを手掛かりに、＜世界国家＞は個人の内面の自由を認めないというその性質ゆえに「砂漠」のような無機質なものに成り果てていること、また、個人の私的な内面は砂漠の地下にまだ生き延びていることを指摘した。この構図において、地下に抑圧されている個人の内面を＜国家＞という地表へと表出させるものが、本節で焦点を当てる真実薬「カロカイン」である。

カロカインは、それを注射することで「どんな人間にも秘密を吐きださせる媒体」(13)である。これは＜国家＞が、それまで介入することのできなかった個人の内面にまで統制を広げることが可能にする。具体的には、犯罪を自白させることや、反＜国家＞的な思想を持つ者をあぶり出して犯罪を未然に防ぐことが可能になる。レオはこれを、「わたしたちの安全、わたしたちみんなの安全、つまりは＜国家＞の安全」(15)をもたらすものとして開発した。しかしこの薬は Winter が述べるように、“repressive” (抑圧的) な側面と“subversive” (破壊的) な側面を併せ持ち、作中にて「真実を引き出す方法」であると同時に「いかにその社会が不正や不誠実のかたちを制度化してしまっているかを見せるもの」としても機能する (226)。その“subversive”な効果としては、カロカインはまず国民たちの内側にある＜国家＞に縛られない思考や感情を白日の下に晒し、次に「自由な意志による語

り」を生み出していく。

最初に自分の意志で語りはじめたのはリンダである。リンダは一度カロカインを注射され、その際はじめてレオに自分の内面を開示することになった。しかし彼女はその後、「恥ずかしさで死んでしまうか、つぎは自分の意志で語りつづけるか、そのどちらか」(213)であることを理解し、自らの意志で自身の内面について語ることを選ぶ。またレオの上司リッセンも告発によって拘束され、尋問室においてカロカインによる尋問を受ける。このときのリッセンはカロカインの影響のもとに内面を語るものの、レオの目にはそれがリッセン自身の意志によって行われたもののように映る。通常、本心を話すことを妨げるのは「怯懦や羞恥」(231)だが、リッセンのそれは「孤独と絶望によって食いつくされてしまった」(231)のだとレオは考える。とはいえ、彼が自身の内面を語りはじめることができたのはカロカインゆえである。したがってリンダについてもリッセンについても、カロカインという薬は個人の自由な意志による語りが生まれるきっかけを作ったのだと言える。

リッセン曰く、この「自由な意志による語り」によって語られる真実は、「人間と人間をつなぐ橋になりうる」(232)。リンダが自分自身の意志でレオに語りはじめたとき、レオは自分が生まれて初めて「ほんとうの意味で」(214)聴いているという感覚を覚える。リンダはレオに対し、自分自身が3人の子ども産み育てるなかで「わたしたちの内部で、なにかが、起こってる」(220)という実感を得た、という旨の話をするが、レオはこの語りのなかに、これまで自分が「抗い、怯え、そして求めてきたもの」(221)を見出す。レオはここで、自分自身のなかにある反<国家>的で個人主義的な思考や感情、具体的には「あたらしく自明にして素朴な絆」(221)への欲求を強く実感し、それらを受け入れた。これまで「砂漠をさまようひと」であったレオはここでようやく、砂漠の街の地下室にたどり着くのである。先述したように、砂漠の街の地下室は、<国家>によって抑圧された個人の私的な内面を表象している。リンダの語りによって、レオはようやく自分自身

の内側にある地下室に踏み込み、そこに湧き出す水、すなわち〈国家〉に縛られない思考や感情を肯定した。ここで彼は「リンダとわたしのあいだに紡がれた固い絆のほかに、もはやなにも存在しない」(221)という感覚を得る。

この手記(『カロカイン』の物語の大半)を書いている20年以上あとのレオは、手記の冒頭で以下のように述べている。

時代遅れのロマンティックな概念として「愛」を語ることも可能だろうが、しかしそれでもやはり愛は存在し、名状しがたい苦悩の要素に彩られているように思われる。ある男がある女に惹かれ、ある女がある男に惹かれる。そして互いに一歩近づくごとに、自分自身のなにかを相手にゆずりわたす。勝利を願いながらも、ずっと続いていく敗北。(中略)彼女は容赦なくわたしを捕らえて放さない。だが、自分はけっして開いてみせない。絶望の中にありながら、なおも奇跡が起こり得るかのよう
に互いにしっかりとしがみつきあっているとき——苦悩そのものがある種の価値を持ち、少なくともひとつの共有物、つまりは存在しないなにかへの期待を有していることのあかしとなったとき——そのときこそ、
「愛」という語を使うのだと、私はそう思う。(Boye 9-10; 拙訳)

レオにとって、「愛」とは常に「苦悩」と「絶望」をもたらすものである。自分が想いを寄せる相手が自分のことをどう思っているのかは、究極的にはどこまでいっても知り得ない。しかし、そのような絶望的な状況の中で「存在しないなにかへの期待」を二者間で共有したとき、それは「愛」なのだという。「存在しないなにか」という表現は、前章にて引用したリンダの「ふしあわせな愛」についての言説にも登場した。リンダは「若い娘」の追求める「なにかべつなもの」のことを「存在しないなにか」と呼び変えながら、それでも「なにかべつなもの」の存在を信じて追求める「ふしあわせな愛」に憧憬を抱く。ここで彼女にとって最大の関心事となっているのは、

「なにかべつなもの」を手に入れることではなく、なにかを得ようとして手を伸ばす行為そのものであることがわかる。これを踏まえると上記の引用は、「なにかべつなもの」——他者との精神的なつながりによってもたらされる自由や安らぎ——が「存在しないなにか」であることを理解しながらもなお、それに対する期待を二者間で共有することこそが「愛」である、というように読むことができる。自らの追い求めるものが幻想にすぎないと知っている彼ら、大人になってしまった彼らは今や、若者のような「ふしあわせな愛」を体験することは叶わない。しかしその絶望のなかで依然として、彼らは相手と幻想への期待を共有することを選び、わずかな希望を見出そうとする。リンダの自由な意志による語りを経てふたりが理解しあった（と感じられた）とき、彼らはお互いのなかに「地下室」を見出し、自らの内に湧き出る私的な思考や感情を肯定した上で、お互いがお互いとともに得たいと焦がれ続けた「なにかべつなもの」への期待を共有することに成功した。それゆえに、このときふたりは「愛」と呼べる状態に至ったのだと考えられる。

またこのことに関してはエピグラフにも注目するべきだろう。本作のエピグラフはT. S. エリオットの長詩『荒地』からの引用であり、「ひとときの降伏の、おそるべき蛮勇、/これにより、これによってのみ、われら、存在せり。」(1)⁴⁾ というものである。＜国家＞において自らの意志で自らの内面を語ることは、作中世界に一般的な価値観のもとでは考えられないような愚かしく、勇気のいる行為である。しかしリンダの語りによってようやくレオが「愛」に至ったように、その語り、つまり「降伏」は、他者との精神的なつながりを形成するきっかけとなる。まずは誰かが「降伏」し自分自身を他者にゆだねることではじめて、＜国家＞に蔓延する恐怖の連鎖に切れ目が生まれるのである。またこのとき、人々を恐怖や羞恥から解き放つことによって自白を導くカロカインという薬⁵⁾ 自体も、「降伏」を引き起こすものであると解釈できる。

この「降伏」の表象は＜狂人の集団^{セクト}＞にも見ることができる。＜狂人の集団＞とは、カロカインの実証実験のなかでその存在が明らかになった謎の集

団である。尋問によって得られた情報によると、この集団は集会を行い、そこで「ナイフと眠りの儀式」を実施する。仲間内のだれかひとりにナイフを握らせ、ほかの者はその周辺で寝たふりをする、というものである。これは<国家>に一般的な常識からすると危険で愚かで信じがたい行為だが、この儀式がどんな意味を持つのか尋ねられると、<集団>に連なるある女性は「象徴的な意味よ。ナイフを渡すことで、自分を他人の力にゆだねる。なのに、なにも起こらない」(116)と答える。さらに彼らは、既に触れた<砂漠の街>に関する伝説のほかに、レオルという名の英雄の伝説を語り継いでいる。レオルは五十年ほど前に生きていた人物で、各地を旅して回っていたとされる。彼は他者から「身を守ろうと」(118)せず、最終的には強盗に殺されてしまったのだが、その性質ゆえにまるで「母親のそばにいる幼い子どもみたいに」(118)、「彼のそばにしていると居心地がよく、やすらかな気持ちになれる、と感じた者もいた」(117)のだという。「ナイフと眠りの儀式」および英雄レオルの伝説いずれからも、<集団>が「他人の手に自分の身をゆだねる」というあり方を提示していることがわかる。

レオに自らの意志で真実を伝えたのち、リンダは自身やレオと同様の、<国家>に縛られない自由な内面や個人同士のつながりの存在に気付いている人々、すなわち「<母>であるようなひとたち」(225)を探し出し、自由な意志による語りを連鎖させていくことを目指す。たとえ「子どもを生むことの意味」(225)を理解していても、<国家>の支配のもとではそれを自ら語りはじめることは極めて難しい。語りによって少しずつ仲間を増やし、「あたらしい世界」(225)を作っていこうとリンダは考えるのである。

以上から、カロカインが強制的に他者を自白させるだけではなく、ときに自由な意志による語りを引き出すきっかけとして機能することが示された。そしてその語りは、個人と個人とをつなぎ合わせていく可能性を持つ。「降伏」によってはじめて、蔓延した恐怖を克服する可能性が生まれるのである。こうして言語という形で<国家>という砂漠に芽生えた個人の内面は、<国家>の支配をすり抜けて、次第にその輪を広げていく兆しを見せる。

第3節 成長していく「あたらしい世界」

それまで恐怖のために表出することのなかった個人の内面は、カロカインという薬の登場をきっかけに言語という形で発現し、それはときに自由な意志による語りを誘発して、〈国家〉の当初の思惑をこえて広がっていく兆しを見せる。これは〈国家〉という死に行く共同体を破壊し、また別の新たな共同体が構築されることを予感させるものである。本節では作中にたびたび登場する植物のメタファーに着目し、「あたらしい世界」が未来という時間的な広がりの中に実現するものであるという指摘を行う。

伝承やレオの夢によると、〈砂漠の街〉においてはその地中にきれいな水や草花、「安全な隠れ家」と感じられるような「屋根のない荒れはてた石の部屋」(190)があり、一方その地表には汚染された瓦礫だらけの空間が広がっているとされる。地中に有機的なもの、地表に無機的なものが配置されているのである。この構図は、リンダやリッセンが用いる植物のメタファーと重ね合わせることが可能である。物語終盤において、リンダは出産を「未知の奥深いところから、樹液がのぼってくる」(220)と喩える。一方で、レオの上司リッセンは「たったひとつでいい、健全のささやかな残滓がどこかに隠されていて、やがては芽をふき〈権力の装甲車〉を突きやぶってこないものか。」(234)と語る。リンダ・リッセン両者に共通するのは地中から芽生え地上に伸びるという植物のイメージであり、これによってふたりは人間の奥底にひそむ生命力への希望を表現している。植物の根や種は地中に存在しており、人間の目に触れることはないが、この地中を人間の深層ととらえた上で、生命がそこから生じて表層に現れてくるというイメージが内包されているのだろう。これを〈砂漠の街〉の構造と重ね合わせると、〈砂漠の街〉の地下室に眠っている個人の内面が、いつの日か無機質な砂漠へと生え出てくるという可能性をも読み取ることができる。地下室にある「水」、すなわち尽きることのない個人の思考や感情は、言葉に姿を変えて、まるで「植

物」のように<国家>という砂漠に芽生え出るのである。

地表に芽生えた植物は、それを摘み取ろうとする<国家>の手を逃れて、次第にその領域を拡大していく。自らの意志による語りは、次第に連鎖し個人を結び合わせていくのである。これは、地表に芽生えた植物が成長しその枝葉を広げていくようなイメージで捉えることが可能だろう。<狂人の集団>に属するある女性以下のように語る。

「^{オルガニサシオン}組織？」と彼女は言った。「われらは^{オルガニスム}組織など求めない。有機的なものは^{オルガニセラ}組織化の必要がない。あなたがたは外側から築くが、われらは内側から築く。あなたがたは自分たちを建物の石にして築きあげるが、外からも内からもくずれおちる。われらは樹木のように築かれる。それは育って、われらをつなぐ橋となる。われらは生命のない物質や生命のない強制とは無縁だから。われらからは生けるものがあふれでる。あなたがたには生命なきものが入りこむ」(120)

権力によって外部から organisera (英: organise) してつくり上げられた<国家>は、organism というよりもむしろ organisation である。翻って、<狂人の集団>が目指す共同体（これは「あたらしい世界」と同じものであると考えられる）は、まるで「樹木」のように、自律性をもって築かれる organisk (英: organic) なものである。そこでは人々は他者を信頼し、自らの意志で自らの内面を語り、この輪は次第に広がっていく。つまり、「あたらしい世界」は成長力を持ち、時間的な広がりの中に構築されていくのである。このとき植物のモチーフは、自律性や成長力、未来への希望の象徴となっている。

しかしながら、「あたらしい世界」は決して容易に実現できるものでも、美しいユートピアでもないことには留意しておかなければならない。他者との間に深い信頼関係を持つことには、常に危険や苦悩が伴う。英雄レオルが最終的に強盗に殺されてしまったように、他者を信頼して身をゆだねたが

ために、その他者に殺されてしまうという可能性はぬぐい去ることができない。自分の内面を語ったからといって、他者と信頼関係を結べるとは限らない。場合によっては自分が傷つくだけという結果に終わるかもしれない。また、リンダとレオがお互いを理解しあう場面はまさに「あたらしい世界」の萌芽だと捉えることが可能だが、それすらも、あくまで苦悩の内に、ごくわずかな希望としてもたらされるようなものであった。自らが得たいと願ってやまない、他者との関係から得られる自由や安らぎといったものが、究極的には決して手に入れられないものであることを彼らは理解しながら、それでもなおそれに向かって手を伸ばす。これは苦悩を——それも、個人と個人が結びあうことのなかった<国家>においては存在することすらなかった苦悩を——自ら選び取る行為である。つまり「あたらしい世界」というのは、それまで<国家>という構造によって免除されていた危険や苦悩をすべて引き受けて、「生の力」(235)、すなわち個人の自由な内面と、個人同士の素朴な絆を地表に取り戻そうとするものなのである。

おわりに

以上の考察を通して、本作『カロカイン』のなかには、<世界国家>という organisera された organism (もしくは organisation) から、「あたらしい世界」という organisk な organism が生まれてくる希望が描かれていることが導かれた。「砂漠」というモチーフが本作の舞台たる前者の共同体を象徴する一方で、その地下にあるとされる空間は決して消えてしまうことのない個人の思考や感情を象徴し、水や植物と結び付けられて、後者の共同体へと至る希望を見せる。個人の私的な内面は、言語という形で植物のように有機的に成長し、次第に「あたらしい世界」を形成していく兆しを示すのである。このとき、カロカインという薬はこの砂漠の地表に緑を芽生えさせる役割を担っており、<国家>という絶望的な環境を克服していく可能性を提示する。物語終盤、レオは敵国<普遍国家>の捕虜となり、最終的にはこの手記の存

在を知られて、紙と鉛筆という言語表現の手段をも奪われてしまう。しかしそれでも彼はその土地で科学者としてカロカインの製造方法を伝え続け、カロカインは<普遍国家>で利用される。<世界国家>と同様、<普遍国家>も厳しく個人を統制しようとするディストピアであると考えられるが、ここにおいて、カロカインはやはり「あたらしい世界」への一縷の希望を見せるものとして捉えてよいだろう。

この「共同体」転換の構造の根底に存在しているのが、我々人間が普遍的に抱える「他者への恐怖と信頼」の問題である。他者というものは究極的にはどこまでいっても理解することのできない存在であり、他者と信頼関係を築こうとする行為は、常に危険と苦悩を伴う絶望的な営みとすら言える。この問題を、作中の<世界国家>は個人の内面の自由を奪い、個人のすべてを<国家>のものとすることで解決しようとした。個人のすべてが<国家>のためだけに存在するのであれば、理念的には、個人はただおだやかな細胞でいることができる。他者とのつながりが無いのだから、他者を信用して欺かれることもなければ、自分の同僚や配偶者が自分のことをどう思っているのかを考えて不安になるということもない。<国家>は国民を用いて、<国家>という共同体を外側から organiserer することによって、他者への恐怖を縮減することを目指した。この点において、<国家>は決して荒唐無稽な空想上のディストピアではない。<国家>は、我々が生きようとする現代社会の欠点を克服する形で打ち立てられたものであることが推測でき、ともすれば我々にとっても魅惑的に見えてしまうような体制なのである。レオは作中において、リンダが自分のことを愛していないことを証明することで彼女への想いを断ち切ろうとさえ試みるが、これは人間関係における苦悩への、ある種<国家>的な対処の仕方とも読むことができる。

「あたらしい世界」もまた、単純なユートピアではない。この共同体は、自らの意志で他者の手に自らをゆだねるという「降伏」をもとに形成されるが、「降伏」したために他者に傷つけられてしまう可能性もまた常に存在している。自分が自身の内面を正直に語ったからといって、相手が応答して

くれるとは限らず、相手の言葉が真実かもわからない。「あたらしい世界」を形作る個人どうしのつながりは、明らかに大きな苦悩を伴う。しかしそれでも他者との間に信頼を築きたいという痛切な願いが、人々を「あたらしい世界」へと向かわせるのだろう。

<国家>に「あたらしい世界」が取って代わり、再び個人の内面やその表現の自由が許される未来がおとずれる可能性は、決して高いとはいえない。<国家>の警察権力はあまりにも大きく、また「あたらしい世界」の前提となる、他者を信頼して「降伏」という行為はそもそも、<国家>という構造を差し引いても非常に難しい。しかし絶望的な状況にありながらも、ときにカロカインの助けを借りて、人々は自身の内面を他者に語りはじめる。そしてその苦悩のなかに「存在しないなにか」への期待を互いに共有したとき、地表に広がる砂漠がいつか緑に変わる、ごくかすかな希望が生まれるのである。

[注]

- 1) タイトルは筆者による訳である。
- 2) 「ゲマインシャフト」というルビは富原によって当てられたものである。原語は“gemenskap”であり、この語は第一に「共同社会」を指す一方で、ナチス・ドイツの「ゲマインシャフト」の訳語としても使われる。
- 3) 本稿の引用に登場する「孤立」「孤独」の語は、原典ではいずれも“ensamhet”（英：solitude, loneliness）ないしはその活用形や形容詞形で記述されている。本稿では便宜上、富原の訳し分けをそのまま用いた。
- 4) エリオットの原典では“The awful daring of a moment's surrender/ Which an age of prudence can never retract/ By this, and this only, we have existed”（lines 403-05）だが、ボイエは“Which an age”から始まる行を省略してエピグラフに採用している。なお彼女は1932年に『荒地』を初めてスウェーデン語に翻訳しているものの、本作のエピグラフは原語のままの引用である。
- 5) Ekelöfはカロカインを「人間を自発的かつ自然にする」薬であり、その効果のもとにある人たちは「夢」を見ているのと似た状態にあると指摘している。

[引用文献]

Boye, Karin. *Kallocain: Roman från 2000-talet*. Bredefeldt förlag, 2016.

Ekelöf, Gunnar. *Blandade Kort*. Albert Bonniers förlag, 2013. Google Books,
<https://books.google.co.jp/books?id=IVVgAgAAQBAJ&lpq=PP1&hl=ja&pg=PP1#v=onepage&q&f=false>.

Eliot, Thomas Stearns. *The Waste Land*. Poetry Foundation,
www.poetryfoundation.org/poems/47311/the-waste-land.

Forsås-Scott, Helena. *Swedish Women's Writing 1850-1995*. Athlone Press, 1997.

Winter, Alison. "The Chemistry of Truth and the Literature of Dystopia." *Literature, Science, Psychoanalysis, 1830-1970*, edited by Helen Small and Trudi Tate, Oxford UP, 2003, pp. 212-32.

ボイエ・カリン『カロカイン——国家と密告の自白剤』。富原眞弓訳、みすず書房、2008。

本稿は2021年3月13日に開催された「第3回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラム」での口頭発表に基づく。

(大学院修士課程修了)

SUMMARY

The Desert and Interiority:
Sprouting of “the Organic” in Karin Boye’s *Kallocain*

Yuka KATAI

In her 1940 dystopian novel, *Kallocain*, Karin Boye describes a totalitarian state of the future, named “World State.” Every citizen dedicates themselves solely to organising the State, and their individual lives no longer possess any meaning. The State is at war with neighbouring states, and its people are required to display loyal cooperation with one another. The recurring motif of “the desert” in this work represents the State, which does not allow its citizens to have the freedom of inner thought. The protagonist, Leo Kall, invents an innovative drug called “kallocain,” which makes people confess their inner thoughts when injected with it. As a result, it enables the State to surveil all private thoughts. However, kallocain also works in an unexpected way. Expressed in words for the first time, private inner thoughts affect those listening to them and trigger a voluntary confession. A truth told voluntarily could connect people with each other. In this context, kallocain offers the hope that the State could be transformed into “a new world.” The cellar under the desert where clear water springs up, which Leo visits in his dream, represents the repressed interiority of individuals; the water could be the source of vegetation, which might sprout in the desert, grow, and eventually cover the desert in green.

At the base of this structure of communal transformation, we can find the universal problem of “fear and trust between individuals.” As dramatized by Leo’s struggle with his wife Linda, the other is ultimately incomprehensible, and building a relationship of trust with the other is a desperate act—always accompanied by danger and suffering. In this work, the State attempts to solve this problem by depriving individuals of everything, including their freedom of thought, and uses them as “cells” to “organise” the State. On the other hand, “a new world” is depicted as something “organic.” It is a community not organised from the outside, but that emerges autonomously through “surrender”—a crucial term in the epigraph that was drawn from T.S. Eliot’s *The Waste Land*. The new world assumes the risk of being killed and the suffering that come with “surrendering” to the other, and tries to restore the interiority to each individual and a simple human bond to the earth.